

利用者の立場に立った施設整備

- ◆ 来館者と博物館、フィールドと展示などを ICT を活用して快適で楽しくつなぐ
- ◆ だれもが能力を最大限に生かして楽しめるようユニバーサルデザインに基づく施設づくりを一層推進
- ◆ ストックマネジメントの考え方を導入し、予防的な維持保全により施設・設備を長寿命化

多様な主体との連携

- ◆ 地域との連携
 - ・ さまざまな地域において体験の機会を提供
 - ・ 主体間の交流や連携の仕組みづくりを推進
 - ・ 体験・学習プログラムを地域の人びととともに開発し実践
- ◆ 関係団体との連携
 - ・ 他の試験研究機関や行政機関との連携を強化し、共同して研究・調査
 - ・ 共同事業、セット回遊、相互訪問ツアーなど博物館間士の連携活動を強化
 - ・ 地元草津市や島丸半島にある近隣施設、近隣関係施設等との連携を強化
- ◆ 学校との連携
 - ・ 県が実施する学習プログラムとの連携を強化
 - ・ サテライト博物館や出前展覧など学校や地域での博物館活動を推進
 - ・ 博物館利用に関心がある教員のネットワークを構築
 - ・ 学校で活用できるプログラムを開発し、教員の博物館利用を促進
 - ・ 県外小中学校の教育委員会や校長会等との連携を強化
- ◆ 企業との連携
 - ・ 企業とともに「湖と人間」の共存関係を築く新たな活動を展開
 - ・ 新しい連携のあり方を提示して協力関係を強化
 - ・ 資金協力と企業の環境保全活動・CSR 活動の発信

効果的な広報・啓発活動の展開

- ◆ 広報・啓発活動の強化
 - ・ ターゲットを明確にし、適切な形でアピールできる魅力を持った情報の発信
 - ・ マスメディア共催やホームページ刷新による国内での認知度の向上
 - ・ 観光客や研究者に向けて海外での認知度の向上
 - ・ 広報・啓発スタッフの配置
- ◆ ビジターズビューロー・旅行業者等との連携
 - ・ 企業、大学とのパートナーシップ協定
 - ・ 料金体系の検討
- ◆ アクセスの向上
 - ・ 路線バスや湖上交通など琵琶湖博物館へのアクセス（経路）の向上

事業規模およびスケジュール、期待される効果

事業規模およびスケジュール

- ・ 新たな知見や技術などを盛り込んで博物館としての魅力を一層向上させ、県民の誇りとなる博物館の実現を目指して展示室をほぼ全面的にリニューアルすることから、他館のリニューアルにかかった㎡単価等を参考に総額を試算すると、20 億円～30 億円程度が必要。
- ・ 3 期に分けてリニューアルを実施するとして、他館の実績を参考にリニューアル後の増加率を算出すると、25 億円とした場合、次のとおり来館者数の増加が見込まれる。

◆リニューアルスケジュール

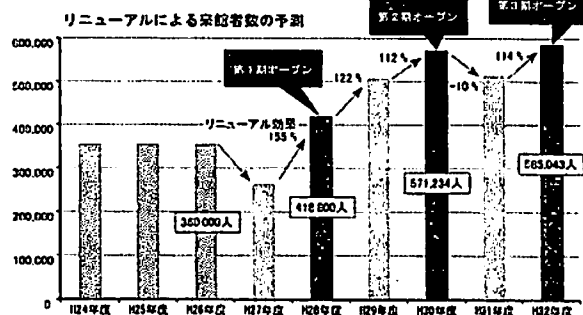
平成 28 年度 (開館 20 周年)	第 1 期リニューアル
平成 30 年度	第 2 期リニューアル
平成 32 年度	第 3 期リニューアル

◆事業規模

20 ～ 30 億円

◆経済波及効果

整備費を 25 億円とした場合
総合効果：56.99 億円
(波及効果倍率 2.280 倍)
就業誘発効果：508 人 整備費を 25 億円とした場合



博物館の「木」から地域の「森」へ

リニューアルを通して、琵琶湖博物館の発信力・活動機能が強化されることにより、次のような効果が期待され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会を実現

心に「種」を
一気づきを促し、地域の未来を地域の人びとと考えるー

- ◆ 過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える
深みのある理解が促進する
- ◆ 地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思ふ人びとが増加する

地域に根ざした木々をつなぎ、発展し続ける「森」へ

- ◆ 琵琶湖博物館を拠点とした新しい社会的なネットワークが形成され、「湖と人間」の新しい共存関係が築かれた社会が実現する

「苗」を育てる
一自らの力で活動する人びとを育み、ともに歩むー

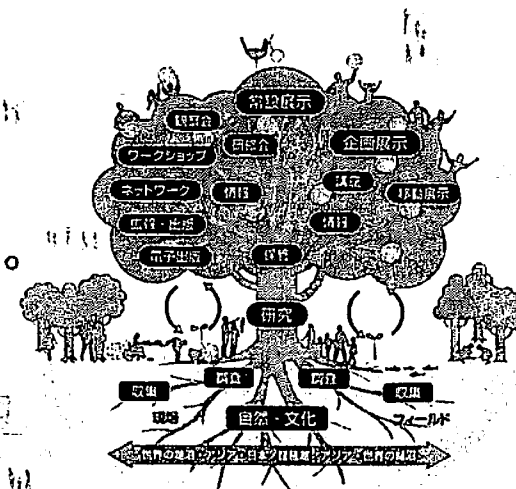
- ◆ 博物館利用が促進されることで、次代を担う人が育つ
- ◆ 暮らしの中に博物館が定着し、地域で新たな活動が生まれ、広がる

琵琶湖博物館創造基本計画素案(概要版)

湖をめぐる博物館の「森」構想

～博物館の「木」から地域の「森」へ～

平成 25 年(2013 年)12 月



新琵琶湖博物館基本計画素案の概要

琵琶湖博物館 17年の実績と課題

これまでの実績

◆博物館の基礎的機能

- 研究・調査により「湖と人間」への理解の進展とともに、琵琶湖のプランクトンや昆虫など新種 50種、新記録種 152種を発見
- 県政課題や県民ニーズの高い課題について研究を行い、成果を環境保全型鳥獣や希少種保護などに活用
- 企画展示を 21回、ギャラリー展示を 40回開催するなど、地域の人びととの協力関係が構築され、博物館活動の基盤が形成
- 「湖と人間」のより良い共存関係を目指した意欲的な展示が好評を得し、800万人以上が来館
- 「はしかげ」、「フィールドレポーター」など市民参加型博物館として先駆的な活動を行い、他館のモデルとなり、国内で高く評価
- 日本屈指を誇る民鳥コレクションをはじめ、累計 85 万点の標本・資料を収集し、データベース 17分野、電子図鑑 8分野を公開

◆博物館の多面的機能

- 環境学習・生涯学習の拠点として県内小学校の 7割超が利用し、学習効果において高い評価を受けてきた
- 文化・観光施設として県内観光入込客数が 22 位であり、文化施設としてはトップ
- 国際学芸員を擁し、国際研究・交流の拠点として海外博物館との共同研究、海外学芸員の受入れ等国際的な研究活動を展開

課題

◆来館者減少への対応

- 平成 12 年に 50 万人だった年間来館者数が平成 24 年度には 36 万人に減少
- 来館者数の減少は「一般」(大人)の減少分とほぼ一致

●マーケット調査から見えてきた課題とターゲット層

- 近隣県民では「知らない人」が 7割
- 「かわりばえしない」「情報が最新でない」との意見が増加
- 大人が満足できる展示・イベントへの要望

- 大人の潜在利用者層：大人が楽しめる展示・レファレンス機能の強化
- 親子利用者層：親子で楽しめる展示・体験空間の提供
- 観光客：観光客が興味を抱く展示や季節ごとに楽しめる屋外体験

◆常設展示の情報発信力の低下

- 研究・調査成果や実物資料の常設展示への活用の必要性
- 参加型・体験型展示により、フィールドの魅力やおもしろさを伝える発信力の高い新たな展示へのニーズの高まり
- 外来生物の移入、鳥獣害の深刻化などの新たな環境課題に対応する学びや情報発信の場の充実

◆人が育つ環境学習の拠点機能への必要性

- だれもが気軽に参加でき、実践できる新たな利用者制度
- 「交流の場」としての博物館から地域での実践を担う「人が育つ」博物館へ

◆少子高齢化・成熟社会への対応

- 民俗資料等を活用した高齢者の癒しの場・元気を取り戻す場、高齢者と子どもたちの交流の場など、博物館の新しい活用のあり方の提示

◆琵琶湖・淀川流域から広く世界を視野に入れ「湖と人間」を考える場

- 琵琶湖の象徴施設として存在感を県内外で高める必要性
- 「飲水思源」の想いを下流府県の人びとと共有し、琵琶湖・淀川流域における拠点として、環境学習への取り組みや情報発信力の強化
- I L E C (国際湖沼環境委員会) や海外博物館等との連携を強化し、アジアをはじめ世界の湖沼研究の取組へ

◆施設整備にかかる必要性

- 多様な人びとに対する安全・安心の確保、基本的サービスの向上、施設充実のための施設整備の整備

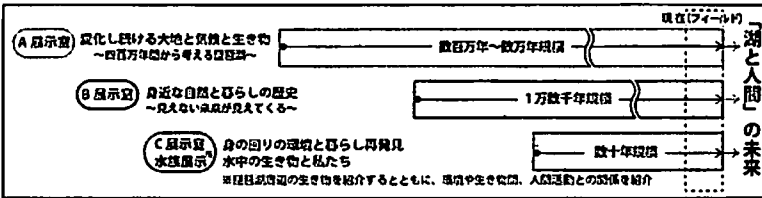
リニューアルでこんな博物館をめざします!

- 「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館**
マザーレイク 21 計画第 2 期の 2 つの柱である「琵琶湖流域生態系の保全・再生」、「暮らしと湖の関わり再生」の実現に向けて、琵琶湖の大切さに気づき、主体的な行動を起こす人びとを応援する。
- 次代を担う人が育つ拠点となる博物館**
県民ニーズに応え、県政の課題や高度化・複雑化した情報をわかりやすく伝え、体験・交流の機会を数多く提供することで、湖と人間が共存する持続可能な社会の実現に向けた次代を担う人が育つ場となる。
- 地域活性化の核となる博物館**
琵琶湖博物館は博物館であると同時に研究施設、文化施設、環境学習施設、観光施設という多面性を生かし、琵琶湖・滋賀を県内外に発信し、県のアイデンティティを高め、地域活性化の核となる施設をめざす。

展示空間の再構築

琵琶湖の魅力発信し、現在とつながる展示空間

- ◆「湖と人間」の未来を考えることができる展示
- 琵琶湖の「現在」を捉えなおす 3 つの時間スケールで、自然や人びとの暮らしの変化、そのつながりを伝え、琵琶湖のいまを感じることで魅惑あるフィールドへ誘う



A 展示室：かわりつづける自然と琵琶湖のおいたち

生き物の進化や絶滅、大地と気候の変化など、長い時間スケールにたつて初めて見えてくる世界を紹介し、現在の暮らしとの関わりや未来を考える展示となる

変化した大地と気候と生き物 ~四百万年から考える琵琶湖~

- ・数百万年~数万年という長い時間スケールでの自然環境の変化を現在の環境問題とのかかりとともを紹介する。
- ・長期的な自然の営みという視点からみた、生き物としてのヒトを考えることで、B 展示室や C 展示室へのつながりをよりわかりやすくする。
- ・地域の博物館や人びとと連携した化石・岩石などの展示コーナーおよび交流を行う空間を設け、琵琶湖フィールドの魅力伝える。



身近な自然と暮らしの歴史 ~見えない未来が見えてくる~

- ・1 万年数千年~数百年の時間スケールでの身近な自然の変化や人びとのかかりの歴史を展示する。
- ・気候変動や大地の変動などが隠れながら変化しつづける自然のなかで、人間の自然環境と暮らしのかかり、水田耕作や仏教など主に大陸から導入された新しい文化・技術の受容と独自の文化のはぐみ
- ・身の回りの世界の中に潜りおもしろさを知ってもらい、博物館の屋外展示や交流空間とつなぎ、魅力あるフィールドへ誘う。



琵琶湖地域のいま ~身の回りの環境と暮らしの再発見~

- ・沿岸域から山地までの身近な環境を入口に、関連するトピックと環境・人間・生き物の関係性をわかりやすく示す。
- ・高度経済成長期以降に起こった重要な変化を紹介することで、現在を捉えなおし、未来を考える展示となる。
- ・身の回りの世界の中に潜りおもしろさを知ってもらい、博物館の屋外展示や交流空間とつなぎ、魅力あるフィールドへ誘う。



琵琶湖地域のいま ~水中の生き物と私たち~

- ・魚類、甲殻類や水草をはじめとした琵琶湖に生息する様々な生き物を展示し、それぞれの生息環境を通じて、琵琶湖のもつ生物多様性や食文化などの「生き物と人のかかり」を伝える。
- ・季節によって違う生き生きとした生き物の姿を展示することで、驚きや発見を促し、暮らしとのかかりを紹介する。



- 【特徴】
- ◆「つながり」を紹介することで自分とのかかりに気づく
- ◆「いま」の展示でフィールドへ誘い、「湖と人間」の未来を考える
- ◆交流や対話がうまれるにぎわいのある展示室

リニューアルコンセプト

高度化・複雑化した情報をわかりやすく、タイムリーに伝える博物館

大人も日常的に楽しめる、活用できる博物館

リニューアルの方向性

常設展示の再構築 体験的な展示を多く取り入れ、琵琶湖の魅力の発信力を強化

- ・発信力の高い展示
- ・いつでも新鮮な展示
- ・県民ニーズ、最新課題に対応した展示
- ・参加型、体験型の展示
- ・地域の人びとと創り上げる展示

交流空間・交流機能の再構築 参加と発見、対話と交流を促し、次代を担う人が育つ交流の拠点

- ・学びと発見の体験交流
- ・博物館と地域をつなぐ交流
- ・実践へつなぐ環境学習
- ・琵琶湖へ誘う屋外交流空間

交流空間・交流機能の再構築

交流空間

【大人のディスカバリー】~大人も遊べるリアルな知的空間~

- ・大人の意味や好奇心に応え、新たな利用者層を呼び込む
- ・感覚で理解するハンズオン展示、自ら調べに知りたくなるきっかけをふんだんに設ける
- ・博物館スタッフが、来館者に対話しながら交流



【ワクワク体験スペース】~いつでも楽しく体験~

- ・いつでも、折々に楽しめる多様な体験プログラムを提供
- ・はしかげ、フィールドレポーターなど地域で活動している人たちが自らの体験・成果を伝え、来館者と直接触れ合う交流

【レストラン・ショップのアミューズメント機能強化】 ~美味しくくつろぎ、楽しさお持ち帰り~

- ・地元産食材や特産品を味わえる特色あるレストラン
- ・オリジナルグッズやCD等、琵琶湖博物館ならではの品ぞろえのショップ

【樹冠トレイル】 ~自然に近づき、琵琶湖を感じる~

- ・琵琶湖を渡る鳥を感じながら、琵琶湖が一望でき、森を上から観察できる空中散歩



【環境学習センター】

- ・主体的に実践行動できる「入居て・入居ち」において中核的な役割を担うため、環境学習の拠点機能を強化し、多様な主体間の協働・連携を推進

【博物館活動室】

- ・はしかげ、フィールドレポーター、地域で活動している人たちの活動場所

【学校・団体向け屋内スペース】

- ・多人数の体験学習や、昼食・休憩スペース

交流機能

【見える、伝わる、広がる参加と交流】

- ・博物館で活動している人たちの顔が見え、興味を持つ人だれもが参加できる交流を展開
- ・リピートしたくなるプログラムの企画・開発



【地域をつなぐ交流】

- ・地域の人びとによる活動を伝え、広める場づくり
- ・国際湖沼環境委員会 (ILEC) などと連携し、資料・情報収集、研究、交流、展示の国際化、地域と海外の人的交流の促進